

第 65 回神奈川建築コンクール 住宅部門最優秀作品選評

「西竹之丸の家」

審査委員：古賀 紀江

本年度の最優秀賞は、35 作品の中から「西竹之丸の家」が選出された。粗削りな部分はあるものの、住まいの計画手法に新たな方策を見出した点と神奈川県特有の斜面住宅地での計画における一つの解法となり得る点は、これからの神奈川県の住まいの質の向上にも貢献できるものと期待する。

まるで昔話のタイトルのような名前のこの家は、狭い急こう配の坂道に「道なりに」建っている。長さおよそ 13m、幅、約 2m と約 4 m の端部を持つラッパのような家である。ラッパのような躯体の海を見渡す一方には 2m×4m の横長の窓、町側には同じ大きさの縦長の窓で町と接している。坂道に沿い 13m の家の屋根の勾配は坂道のそれとそろえ、坂道側の壁面は開口部を抑えて「擁壁の擬態」をしている。道と反対側の面は、周囲に広がる住宅が持つ寸法やデザインコードに寄り添うことで、街並みに溶け込む努力をしている。夜、ラッパの両端に光が入る様子は意外なほど美しく、周囲の住宅街に溶け込んでいる。

細長い敷地の道側に寄せた細長い住宅の隣地との間には、日当たりの良い庭が置かれている。家の周囲には自由で気楽な光と風が満ちている。そして、室内にも隣地との間を広くとって設けた庭空間を介して明るい光がふりそそぐ。庭空間は、この不思議な躯体の形状が狭小敷地に無理やり押し込まねばならない事情から生まれたものでは無く、夫婦と子供 3 人の家族のくらしのために「計画」されたものであることと強く結びついたものであることを教えてくれる。

この家を設計した建築家の言い回しによれば、「道のような空間」あるいは「リニアな空間」は、これも建築家の言葉をそのまま借りると、「一人から数人が程よい距離感を保ちながらひとつながりの場を共有することができること」、「外部環境との接点をより多く持つことができること」が可能な空間である。2 階を見るとその意味が良くわかる。一つながりの、少し屈折した空間に、縦長窓側のキッチンや小さな居場所やダイニングテーブル、横長窓側のソファ、所謂「居場所」が、見え隠れしながら続く。場と呼ばれるテンポラリーな現象が生起するための居場所を配することでこの住まいは構成されている。

居場所を配することと構造が絡み合うのもこの建築の特徴である。長さ 13m 距離を持つ空間で、天井高は 1.9m から 4m まで緩やかに変化する。そこに配された木ブレースが、窓際では明るい抛り所を作り、長い空間部分では「空間を緩やかに干渉して」「仕切る」役割などを担っている。加えて、この建物での構造には上記の他、「明るさ」を担保する役割がある。1 階は 455 mm ピッチであらわしになっている根太に、光をまわりこませて明るい天井

面を演出している。計画と構造デザインが気持ちよくリンクした作品である。

ところで、先述の建築家が示した二つの狙いは、そのままこれからの住まいの計画の方法論として生かされていくべきものである。いささか大げさな表現ではあるが、住まいの計画の新しい方法の発明である。この家の細長い形状は、敷地特性とこの方法論において妥当である。形態の新奇性を求めた結果でもなく、場所への思いだけで終始されるのでもなく、極めてシンプルに住まいづくりの視点を具現化した上での「リニアな空間」なのだ。これは、同様の条件を持つ敷地を解く上での発見かもしれない。